

子育て・子育てのライフストーリー (1)

Life Stories of Child Rearing and Child Development (1)

請 川 滋 大*

UKEGAWA, Shigehiro

1 はじめに

1-1 問題意識

この論文は、インタビューによって聞き取った子育て・子育ての経験を、親自身と子どものライフストーリーから捉えていくことを目的としている。

子育てを考えていく際に、一つの学問的な枠組みに縛られていると、そこから見えてくる姿は一面的にならざるを得ない。それは子育てという営み自体が、親と子という異なる時代に生きてきた人々が関与する場だからこそのことである。この片寄った視点を克服するためには、ある時点での社会的状況や人間関係(「ヨコのつながり」)をみるだけではなく、時間軸を含めた上での歴史的な視点(「タテのつながり」)を取り込まなくてはならない。このような視座を持つ代表的な研究として、社会学者のグレン・H・エルダーらを中心としたグループの成果がよく知られている。

エルダー(1974)は、1929年に起こったアメリカでの株価大暴落をきっかけに引き起こされた世界大恐慌の元、アメリカに住む家族や子どもたちはどういう経験をして成長・発達してきたのかということ、社会史的な視点から詳細に分析している。その後に行われたエルダーら(1993)の共同研究は、1983年から6年あまりをかけて行われたプロジェクトの集大成である。こちらの研究グループには、エルダーを始めとした社会学者の他、心理学者や歴史学者など学際的なスタッフが加わっている。このような体制を作った背景には、彼らの人間発達に対する考え方が強く反映している。それは人間の発達というものを、個人の内的な原理だけで説明しないという視点である。

歴史的な時間と空間の中の子どもたちを研究することは、人間発達の生態学において重要であるが、しかし無視されてきたパースペクティブである。心理学者は、子どもや個人という観点から社会の特性を評価する。彼らは問う—子どもの思考や知覚のような特定の発達過程、および達成や攻撃性のような発達の結果にどのような社会的影響が関係するかと。対照的に歴史学者や社会学者、文化人類学者は、社会環境をそれ自体の価値によって研究課題として見る傾向がある。このような視点から、彼らは大恐慌の小さなコミュニティに対するインパクトのような特定の時間と空間の行動への影響を、特定の家族や近隣における子どもの経験にまで跡づけようとしている。彼らは大きな社会的文脈および子どもに対する文脈の意味から研究し始めた。(G.H. エルダー—1997「時間と空間の中の子どもたち」p. ix)

彼らの視点においては、心理学的な部分よりも社会・歴史的な説明がより優位である。この視点は、これまでの心理学に対するアンチテーゼとしては非常に示唆的なものである。だがそこに潜む問題は、発達を説明する際に人間の内部（心理的側面）へ焦点をあてるか、あるいは人間の外部（社会・歴史的側面）に焦点をあてるのかという二元論に陥ってしまうということである。

発達という現象を考える際の2つの視点は、一つには人間の生得的な部分をどう捉えるかということ、そして二つめはその生得的な基盤の上で何が獲得されるか、つまり経験的要因というのはいったいどういったものなのかということである。この経験的な要因の部分においては、その量のみが問題になるのではなく、質の部分を実証的に検討して行かなくてはならない（無藤、1990）。量だけではなく経験の質を問題にするということは、当事者がその経験をどのように捉えたかということが非常に重要となってくる。他者には経験できないその当時者性こそが問題なのである。これは言い換えれば、その当事者にとっての出来事の意味を捉えていくことに他ならないのではなかろうか。だがこれは容易なことではない。なぜなら、出来事＝意味ではない。同じ出来事が起こったとしても、それをどう捉えるかはその個人によって異なったものとなるからである。そう考えると「意味」というのは、ある出来事と出来事をどう結びつけるかという行為（やまだ、2000）そのものではないかと考えさせられる。この出来事と出来事を結びつけるための語り（ナラティブ）、それ自体を分析の対象にしようというのが本稿での主眼となる。

ところで出来事というのは、ヒトとヒト、ヒトとモノが関わり合う場において起こるものであり、まさに相互行為である。子育てもその例外ではない。この相互行為自体を研究対象とすることで、前述の二元論を乗り越えようとしている学問的立場がある。それは「シンボリック相互作用論（symbolic interactionism）」と呼ばれるスタンスをとる学派で、社会学から派生してきたものである。伊藤（2002）はこのシンボリック相互作用論の最大の特徴を、「意味の重視」*1にあるとしている。そして相互行為というものを、従来の社会学や心理学とは異なるものと捉えている。従来、社会学や心理学では、その説明要因が社会的なものか心理学的なものかという違いはあったにせよ、どちらの立場もそれらを個人の行動を説明する独立変数としてとり扱ってきた。ところがシンボリック相互作用論ではそのように考えない。以下に伊藤（2002）の説明を引用する*2。

シンボリック相互作用論は、相互行為を、なんらかの要因に突き動かされた行動の単なる交差ややりとりだとは考えない。というのも、シンボリック相互作用論にとって、人間の行動は、自己再帰的な解釈能力を持つ行為者が展開する能動的な活動であるからだ。したがって、相互行為は、複数の行為者が、それぞれに状況や自他の行動を表示し・解釈し考慮しながら、互いの行動を織り合わせて、活動の動的連関を生み出していく自己形成的な過程であり、それ自体として考察されねばならない。（傍点引用者）

このような点からも、子育てという相互行為を自己再起的な能動的活動として、その語り自体を対象として扱うことを目的とし、論考を展開していきたい。

なお、個人の経験に焦点を当てた研究を社会学や文化人類学の領域ではライフ・ヒストリー研究というが、ここではライフストーリーという用語を使用することとした。これは、中野・桜井（1995）の分類に従ったものである。ライフストーリーとは、語り手によって語られた人生や経験そのものであるが、ライフ・ヒストリー（生活史）とは、口述されたライフストーリーに加え、歴史的・社会的な出来事を照合したものである。藤本（2003）は、中野と桜井の論点を検討し、その違いを「事実」の信憑性のとらえ方であるとしている。中野の立場では歴史的な裏付けという側面を重視するため、ライフストーリーはライフヒストリーを構成するための一素材にすぎないのだという。つまり中野のいうライフヒストリーとは、ライフストーリーに社会・歴史的な裏付けや分析を加えたものとなるだろう。本稿では、基本的に当事者によって語られたもののみを資料としているので、ここではライフストーリーという語を用いた。それは、やまだ（2000）がブルーナー（1984）を引用して述べるように、「語られた生（life as told）」の重視に他ならない。

1-2 「子育て」と「親育て」を含んだ「子育て」

「子育て」が語られるとき、その言葉が示すように「親」が「子ども」を「育てる」という側面ばかりが強調される。子どもは親やおとなが手をかけなければ育たないという考え、つまり子どもは育てられるべき存在であるという考えが根強いからであろう。親がきちんと子育てをしないと子どもは育たないといった論調である。そして時世によって、母親の役割というのが殊更に強く叫ばれたり、乳幼児期の重要性というものが世の親たちの不安感を煽るように喧伝されたりした時期もある*³。しかし、確かに子どもは親のケアを受けて育っているのだが、実際に子育てを通して育っているのは子どもだけではなく、実は親の方も親としての育ちを着々と進めているのである。「親」というのは、子どもが産まれたと同時に社会的には親と呼ばれるようになるわけだが、親としての本質的な意味が備わってくるのは子育てを通してなのである。例えば、子どもを育てていく上で、色々と忍耐しなくてはいけないことがある。子どもが産まれる前であれば、自由にできていた外出や旅行などが不可能になる。夜泣きする子どもに起こされ睡眠が妨げられる。食事を作るときにも、常に子どもたちのことを念頭に置きながらメニューを考えなくてはならない。それまではお金も時間も自由になっていたから、自分中心または夫婦中心の生活ができていたのだが、がらりとその生活スタイルを変えなくてはならない。特に日本の親たちは、「子どもを育てるのは親の責任である」ということを必要以上に感じているようだ。それは子どもの生命や生活を保障するということに留まらず、質の高い教育を与える（質の高さをどう考えるかによってその内容はまちまちであるが）、良い就職先を確保する、そして下手をすれば結婚相手を探すことまでが親の責任だと考えている節がある。原（1979）によれば、ヘアーインディアンの親は、日本ほど親子のつながりを強く考えないとい

う。親には親の運命があり、子には子の運命があると考えなのだ。それは言わずもがな、人間の力ではどうにもならない力がこの世には存在するという、自然への畏敬の念に他ならない。日本を筆頭に、文明が進んだ国々ではすべてを人間の手で操れると思っている側面があるが、それは子育てにおいても然りなのである。

ところで、いささか古い資料になるが、増田（1969）はその著書の中で以下のように述べている。

伝統的なイエ制度の考え方では、家庭は、夫婦本位の世代が、それぞれ独立する集団ではなく、親から子へ、子から孫へと続く世代の連続であり、しかも、それは、男子のあととりに沿って結ばれていく集団と考えられていたから、いきおい、家庭のイメージとしては、タテのつながり、すなわち、あととりを結ぶ世代のつながりとしてとらえられ、ヨコのつながりとしての夫婦は相対的に軽視される結果を招くことになった。

これは伝統的な日本の家族において一般的な姿であったものだが、現代は緩やかながらも変わりつつある。しかし、北海道や東北に多くみられる農業を生業としている家では、多くの土地を所有しているという理由からも後継者問題というのが家族における重要な課題となっており、未だタテのつながりが強い。もちろん時代と共に変化しつつある部分も確かだが、サラリーマン世帯とは違った家族の問題があるようだ。

そのような問題意識から、本論文では後継問題を抱えた農家の家族に対するインタビューを元に、子育て・子育ての部分を見ていきたいと思う。

2 方 法

インタビューは一人の中心となるインタビュアー（記録ではIとする）と、主に記録をしながら合間で質問をするインタビュアー2（記録ではI2とする）とで行った。研究の対象となった対象者は、若井・請川・北澤・金澤（1997）に詳細が記されているので、そちらを参照して頂きたい。ここでは、この論文における対象者とインタビューの方法について記していく。

今回の対象はMさん一家である。Mさんは40代半ばの農業を営む男性。主に米を作っている。その妻であるNさんも40代半ばで、家業である農業の花弁部門を中心となって担当している。MさんとNさんの長男であるYさんは20歳の男性。インタビュー当時、警察官になるための試験に合格し、全寮制の学校に入って警察官になるための準備を進めていた。

インタビューはそれぞれ別々に行われた。場所は、MさんとNさんは自宅の居間にて、寮に入っているYさんには大学まで出てきて頂いた。それぞれ、1時間半から2時間程度の時間をかけて面接を行い、記録はカセットテープレコーダーと筆記で行った。

インタビューは半構造化された質問紙を用いて行ったが、話の流れに沿って自由に語ってもらうという形式をとった。

3 結果・考察

3-1 Mさん（父）のライフストーリー

Mさんは、昭和20年代半ばに北海道の穀倉地帯で生まれている。男二人、女二人の4人兄弟の中で一番早く生まれた長男である。Mさん自身は米農家の3代目で、祖父の代から数カ所に渡って移住を繰り返しているものの、一貫して農業に携わってきている家系である。北海道に渡ってきたのはMさんの祖父で、大正時代の初期に北陸から札幌に近い農村地区（道央）へ入植してきた。Mさんの父は大正生まれ、北海道に渡ってきてからしばらくしてから生まれたことになる。この頃はまだ本家に大家族と共に暮らしており、人手もたくさんあったので暮らしぶりはそれほど悪くはなかったと語る。

さて、この当時（昭和20年代）の子どもたちの生活というのはいったいどのようなものであったらうか。深谷昌志（1996）は、昭和29年に札幌市で行われた調査報告を元に、当時の子どもたちの様子を記している。

札幌北九条小学校では、昭和二九年に子どもたちの生活調査を行っている。その結果の中から主な結果をまとめて、紹介しておこう。

- ① 映画＝「好き」は49%（「月1、2回」は36%）
- ② 紙芝居＝「好き」は29%。紙芝居を見るのを「喜んで許す」親は17%
- ③ 家庭学習＝「毎日する」は60%（30分位が36%）

（中略）

こう見てくると、子どもたちの生活が何となくのんびりしている印象を受ける。働くことから解放されたとし、勉強はそれほど激しくない。子どもたちがのどかに子ども期を過ごせた時代なのであろう。

この分析について、深谷もその著作の冒頭部分で指摘^{*4}しているように、都市部の特徴は顕著に表れているようではあるが、地方の子どもたちの様子を示しているとは言い難い。昭和20年代に映画を月に数回も見に行ける子どもたちは、都市部に生活している富裕層の子弟だけだったであろう。

Mさんは、小学校から中学校時代の生活について、以下のように語っている。

Mさん〈ナラティブ1〉

I：小学校時代から高校時代までを通して、印象に残っているということは？

M：あんまり、鈍感だからそんなのないけどな。

I：あまりないですか。

M：中学、高校時代、平々凡々で生きてたからさ。元々、本家にいたもんだからさ。それでうちのじいさん（Mさんの父親）っていうのは兄弟いっぱいいるから、十何人いたからね。したからさ、本家にいるときはまだ下（Mさんの父の弟達）にいたからさ、僕の他にね。だから、まったく何も考えないで過ごしたって言う感じだね。

I：家の手伝いとかは結構した方ですか？

- M：いや、本家にいるときはしないよ、人手がいっぱい足りているから。
- I：そうすると、T町に分かれて（分家して）から手伝った？
- M：そう、少しね。そんなに手伝ってないよ。
- I：そんなにやったという記憶はないですか？
- M：うん、なんばかはやっているのかもしれないけれど、そうでもないよ。
- I：親にも手伝って、言われていたんだらうか？
- M：うーんどうかね、あんまり記憶にないね。
- I：じゃあ、農家の子どもとして生まれて、農家の子どもとして育ったということを実感したのはいつ頃ですか？
- M：いや、農家に生まれたら農家をしろというのが、そういうパターンだから。だけど、今はもう農家に生まれても農家しろって人はいないから。
- I：ご主人自身は、その葛藤みたいなものはあまりなかったですか？
- M：ぜんぜん、ぜんぜんないね。
- I：最終的に農業をやろうと思うまでの間に、迷いとか？
- M：なんもないね。だからさ、それはその時の流れじゃない。今が悪いんじゃないよ。それが普通の流れだと思うんだよね。
- I：本当は嫌だったけど、長男だからやっぱりやらなくちゃいけないかなと思った人もいたと思うんですけども。
- M：いや、そんなことはないんでないかい。たださ、高校だけはT農業高校じゃなくて、R学園（私立）の高校に行きたいなとは思ってたけどさ。
- I：それは、牛のことも勉強したいとか？
- M：いやいや、機械が好きだからさ。だけど、地理的にも遠いし、お金もかかるでしょ。そういう面で諦めた部分もあったわけであって。
- I：それにしだって農家やろうっていうのは。
- M：そうそうそう（そう思っていた）。

暮らし向きは特に貧しかったという思い出はなく、Mさん本人の言葉で記せば「普通」ということになるだろう。そして「生まれたときから農家になろうと思っていた」とMさんは語る。

そのMさんの父が昭和38年に分家し2ヘクタール（以下haとする）の土地を購入し、隣の町へ移住した。この頃Mさんは中学生である。そして3年後、受験のために高校を選択しなくてはならなかったときも、Mさんの「農業をやりたい」という思いは変わらなかった。

本人の希望通り公立高校の農業科に進み、そこを卒業してから空知の農業学園へ進学し2年間勉強をする。その後、さらに1年間札幌の中央農業学園に進み勉強を続けた。

そして昭和45年、Mさんが20歳になった頃、父に連れられて移住してきた土地が堤防工事のために買い上げられることになり、その場所を立ち退かなければいけなくなった。そこでMさんらは再度土地を移り、新たな耕地5ha買うこととなる。この時に買った場所が、現在耕作している場所でもある。

それから4年後に結婚、翌年には待望の男の子が生まれた。それが長男のYさんである。

Mさん＜ナラティブ2＞

I：長男が生まれてうれしかったっていうのはどうですか？

M：うん、それはあるんでないかい。やっぱり農家だからさ。そうして自分がやっぱ、農家ずっとやってきたもんだからね。やっぱりそれは、これからいいかなと思ったよ。女の子よりは逆にね。

I：Yさんの名付け親というのは、また意味みたいなものは？

M：まあ将来を志して欲しいということだね。

I 2：お父さん（Mさん）の名前を一字取られて？

M：そう、それもああるね。

I 2：あと何か、字画とか？

M：そう、字画だとかそういうもの見てね。

I：これはお父さんが考えられたんですか？

M：いやそんなことないけどさ、自分の字も使って欲しいしさ、あと画数も見てね、本なんか見て。

その後、移住当時5haだった土地は買い増され、今は全体で16ha余りの土地を所有している。これは北海道以外の米農家にとっては驚きの広さかもしれないが、北海道のこの地域では10ha以上の土地を所有しながら米作を営むことはそれほど珍しいことではない。

農家という概念について湯沢（1987）によれば、農地を3アール（以下aとする）以上耕作する家族を一般に「農家」と呼び、1ha前後の農地を持つ農家が中間層の営農状況、2.5ha以上の土地を所有する農家は大規模層となる。この基準に当てはめて考えると、北海道の農家というのはほとんどが大規模層の農家であり、かつ専門の農家ということになる。専門とはいえ、冬場に除雪やトラックの運転などのアルバイトをすることもあるが、家計の大部分は本業である農業で賄っているという。しかしこの大規模農業も決して楽なものではなく、話を聞けば非常に苦しい会計事情が分かる。それはこういう仕組みになっている。農業で収益を増やすためには、3通りの方法が考えられる。一つは土地を増やすこと、二つめは面積当たりの収穫率を高くすること、そして三つめとしては高い商品価値をもった農作物を作るという3つである。

まず一つめの土地を増やすこと、これが一番手っ取り早く手のつけやすい方法である。農業大国である北海道においても農業を続けていくことは非常に厳しく、また跡継ぎの問題もあり、離農しなくてはならない農家も出てくる。そうして離農していった家族が所有していた土地を、隣の農家が買い取って土地を増やすということが頻繁に行われる。しかしその土地の規模は10数haである。1haとは100aに相当し、通常面積を示す単位である平方メートルに換算すると1万平方メートルとなる。一辺の長さでいうと、1haは縦横がそれぞれ100メートルの土地となることを考えてみても、10ha以上というのは相当広い面積であるということが想像できるであろう。その土地を購入するのである。当然、借金をしなくてはその土地を手に入れることはできない。その金額が数千万円の額となることは珍しくない。また借金はそれだけに留まらず、コンバインなどの農業機器の購入、農作物を保管するための倉庫の建築、また土壌改良（例えば水はけを良くするための暗渠工事など）するための費用など、すべてあわせると1億

円近くの借金を抱えている農家もあるのが実情である。このように大きな借金を抱えてしまうと、農家をやめるにやめられず、また子どもの代まで引き継いでもらわないと借金返済が出来ないという事態も起こりかねない。そういった面からも、農家の後継者問題というのは、親の営農方針にまで影響を及ぼすような重要な問題を抱えているのである。さらには子育ての方針として、将来子どもに農家を継ぐようにいいながら育てるのか、またはその逆に農家にだけはないように言うのかということなども、親の職業に対する考え方、家業である農業についての考え方に強く影響を及ぼされているようである。とりわけ父親の場合は、自分自身の仕事への考え方が、子育ての考え方の中にも多かれ少なかれ反映している場合が多い。

さて二つめの単位面積当たりの収穫量を多くすること、これはそう簡単ではないようである。土地が肥沃かどうか、それは元々の大地に由来することであるからそれを変えるというのは難しい。例えば米であれば、品種の工夫や土地の改良を行ったとしても、ようやく10a（現在でも1反と呼ぶことが多い）辺りの収量が1俵上がれば精一杯といったところであろう。さらに難しい問題は、収量だけ上げればそれで良いのかというとそうではなく、味（食味）も良くなければ高く買い取ってもらえない。収量は増えても味が落ちてしまったというのでは、意味がないのである。

そこで三つめの、高い商品価値をもった作物を作るといふ工夫が出てくる。例えば米ならば、無農薬や低農薬の米を作り、さらにそれらを独自のルートで販売するなどということが行われている。筆者が調査した地域では、かるがもを田んぼに放すことで害虫を駆除させ、できるだけ農薬を使わない米を作っているという農家に会ったこともあった。これは右肩上がりの経済成長を続けてきた時代、どんどん土地を買い足して農業の規模を拡大してきた農家が、バブル経済がはじけて土地の価格もずいぶん安くなり、土地を手放したくとも売れない状況になってしまったという経験からの善処である。また現代は食物の安全性が叫ばれる時代であり、少し高くとも安心できるものを食べたいという都会の富裕層のニーズに応え、じっくりと手間をかけた米を高く買い取ってもらうという方策に出る農家もある。

さてその後もMさんは子宝に恵まれ、4人の子どもたちの父親となった。長男のYさんに尋ねると、父のMさんにはよく怒られたという。そして、褒められたことはあまりないとも語った。それは長男に対する父親の気構えというものもあるだろうが、Mさん自身の仕事に対する厳しさが子どもに対しても表れていたようである。

父性について林（1996）は、その条件として第一に「まとめあげる力」をあげている。これは家族をまとめあげる力であり、中心的な原理をきちんと示せるかどうかということにかかっているという。この力は、父親になった初期の段階ではなかなかはっきりと示すことが難しいのかもしれないが、実際のところは子育てによって父親の側に形成されるという部分もある。しかしそれ以上に、父親の場合は仕事によってその力を備えていくことが多いように見受けられる。Mさんもその例に漏れない。

Mさんの場合でいうと、農業という仕事に対して明確な将来像を持っている。それは、農家

の長男として生まれてきたということに始まり、学校生活の中でも着実に築かれてきたのだろうということがインタビューの端々に感じられた。

一つの例として、営農方針と後継者の問題について尋ねた部分を取り上げてみたい。

Mさん〈ナラティブ3〉

I：(農業経営に関しての) 借金というか、返済というのは？

M：いや、それはないよ。

I：でも今、資金入れたりだとかそういうこともして？

M：資金入れてないよ。だいたいある程度用途のつくような形でやっているから。

I：でも最近も土地買ってるから。

M：うん、買ってるけど。

(中 略)

M：うちの経営方針としては、なるべく外部の資金を入れないでうまく賄えるような形で行こうかなと思ってやっってるの。

I：というと、今資金の支払いみたいなやつはほぼ？

M：ゼロ。

I：ゼロですか、それもあんまり聞いたことないですね。

M：いやそんなことはないよ。

I：じゃあ、現在の負債高もないということですか？

M：ゼロ。

(中 略)

I 2：これはご主人昔からの考え方というか、後継者の問題で、例えば息子さんが跡継ぎができないということになって借金があったら(困る)ということも考えられているんですか？

M：いや、そんなことはないよ。

I 2：じゃあ、本人の考え？

M：うん、そうそうそう。そんな息子のためにさ、どういう経営をしようなんてそんなこと考えたらやれないもん。

Mさんの営農についての考え方で驚かされるのは、ほとんど負債のない状態でこの広さまで拡張してきたということである。鷹田(1997)は、根釧原野に入植した酪農業を営む家族の事例を数例あげているが、どの家族も現在に至るまで様々な苦勞をしてきている。Mさんの場合、根釧台地とは地質や扱う作物が異なるとはいえ、工事立ち退きの憂き目に合い移住をしてきたことから道東と同様の苦勞があったことと察せられる。しかしMさんは、その経営方針として、できるだけ借金をしないで農業を営んでいくという原則を守ろうとしてきたのである。これは北海道のように大規模な農業を行っている地域では大変なことである。土地を拡張したり、土壌改良したりするには数千万単位で経費がかかってしまう。これらの経費は、あまりにも額が大きいので、農協や国が資金を貸与してくれる場合が多い。ところが、やはり借りている金であるから将来的には金利もあわせて返さなくてはならない。だが、あまりにも莫大な借金を抱えると返済もままならないので、さらに土地を増やして収穫量を上げたくないと

いう悪循環に陥りかねないのである。このような経営を繰り返しては、いつまでたっても無借金経営はできない。それならば、資金を蓄えてから土地を買い増したり機械を買い換えたりした方が良く、というのがMさんの考え方なのである。このような、仕事に対しての頑固な姿勢というのが、意識せずとも子育ての面にまで表れてきたようだ。

後継の問題については、「やりたければやればいい。いまは、農家の長男だから農家を継ぐという時代ではない。」とMさんは語っている。その言葉通り、農業の営み方も自分の代で精一杯やろうといった感じで取り組んでおり、また息子には直接「農家を継いでくれ」と言ったことはほとんどないようである。しかし後に見る長男Yさんの語りからは、父が跡を継いで欲しがっているということをひしひしと感じている息子の姿が描き出される。

3-2 Nさん（母）のライフストーリー

Nさんは昭和20年代後半に米農家の家に生まれた。インタビューの当時は40代半ば。兄が二人いる3兄妹の末っ子。子どもの頃の暮らし向きは、とりわけ我慢させられたわけでもなく、かといって贅沢をさせてもらった覚えもない。子どもの頃は、親にガミガミ言われた。母というのは、人のことを根掘り葉掘り聞く人だったので、自分は子どもたちにそういう風に聞かないようにしている。夫婦げんかの多い両親だったから、自分はそうなりたくないという思いが強かった。母は自分の意志を貫く人で、父も芯が強く譲らない人だった。母親は気が強く仕切るタイプだったので、娘としてはその姿勢に反発していた。

高校の農業科定時制を4年で卒業し、その後空知の農業学園へ進学している。特に何も考えてはいなかったので、兄たちと同じ学校へ行った。頭のいい子は普通科へ行く子もいたが、その当時は女性が就職することに関して社会的な要請は強くなく、農家の娘は農家に嫁ぐというのが一般的だった。しかし、高校へ行くのは当たり前の時代で、中学校を出ただけの子どもはクラスに一人か二人だけだった。

農業学園を卒業後、学校の先生の紹介でMさんと結婚をしている。22歳の時であった。結婚した翌年、長男のYさんが生まれている。

Nさん＜ナラティブ1＞

I 2：Yさんっていう名前はなかなか読みづらいんですが、何かいわれとか？

N：姓名判断の本を開いたり、うちの苗字にはどれが合う、長男の名前はどれがいいって、お父さんが凝って。

I：それはお父さんが本を読んで調べられた？

N：そう、主人がつけたの。お父さんの一文字を使いたって。

I 2：あと画数とか。

N：そうそうそう。

I：やっぱり長男が生まれたことでうれしかったとか、長男がやっと生まれたとか、そういうのはあったんですか？

N：そうね、やっぱり男の子だったから嬉しかったですね。家中みんなそうだったんでない、跡取りみたいなね。

Nさん自身は、自分が子どもの頃に母親から口うるさく言われたことが嫌な思い出となっているので、あまり子どもたちにガミガミと言った覚えはないという。勉強しなさいとか早くしなさいということは、意識して言わなかったようだ。

Nさんから見ると夫のMさんは、古風な父親として映っているようだ。子どもにはあまりうるさくないのだが、考え方は昔気質の所があるという。

Nさん＜ナラティブ2＞

I：どういうところが（昔気質ですか）？

N：自分は会館に行くのに車に乗ってサーッと行くけど、子どもたちには歩け歩けて言うんだよね。だから、ちょっとくらい雨降ってたって歩いて行って言うの。俺だって歩いたんだから、おまえたちだって歩けて。その方が体力ついて丈夫になる、いいんだって。（長男なんかは）近所の子は、よく車で送ってもらっているのに、俺は絶対に送ってもらえなかったって。だから、E高校に行くんでも自転車で通わせたんですよ。

I：えっ、どこまでですか？

N：学校まで。1時間近くかかるんだってね。いま、3番目の子どももE高校に行ってるんだけど、それもやっぱり自転車で。冬場はまあ仕方ないけれど。

I：うわー。

N：それでも上の子（長男）の時なんかそんなにね、部活があるから送ってったとか、迎えに行ったとかって滅多ないんですよ。だんだんもう親も慣らされてきて、（下の子たちの）送り迎えとかしているんですよ。したら、（長男が）俺の時はこんなに送り迎えしなかった、ずるいってけんかしたりしてるんですよ。

I：雨降ったりしている時は合羽きて行ったりしてたんですか？

N：いや、合羽じゃないけど、少しだけの時はそのまま行ったんじゃないかね。どっちかって言ったら、今の方が迎えの回数は多いですね。ひどい時は心配になって迎えに行ったりしてたんですけどね。でもよっぽどでない、上の子の時は送り迎えはしてないんですよ。

I：はあー、すごい。

N：だからそういうのがもう、すごく心の底に、子どもの方には残っているみたいでねえ。

次のYさんのナラティブにも見られるが、こういう所での父親に対する不満というのが今も残っているようだ。自分が父親になれば、この厳しさも理解できるのかもしれないが、今の段階では「父の気まぐれ」としか捉えていないようである。このような日常の積み重ねが、早く親元を離れて一人になりたい、親の仕事を継ぎたくないという気持ちにつながっているのかもしれない。

古澤（1986）は、長年継続して行われてきた夏のキャンプ場面でのおとなと子どもの関係を以下のように振り返っている。当初、子どもにとっておとなというのは「頼られる存在」であったが、ある時期にはおとなが「締め出される存在」となり、そして子どもたちが青年期を過ぎる頃になっておとなは「ともに考える仲間」になっていったという。Yさんにとって父親のMさんは、まだ「締め出される存在」の側面が強く、古澤の言う「ともに考える仲間」にはなっていないのだろう。

3-3 Yさん（MさんとNさんの長男）のライフストーリー

Yさんのライフストーリーについては、拙稿（1998）にて図示したことがあるので、ここに再掲させて頂く。いま改めてみると、矢印の向きというのが必要以上に意味を持ちそうな気がするのだが、ここでは内容を変更せずそのまま引用する。なおこの図は、請川・北澤・若井（1998）においても同様の方法で公表されている。

Yさんは昭和50年代前半生まれの男性。インタビュー当時は20歳であった。第二人と妹が一人の4人兄弟で一番年長にあたる。小さい頃の思い出として、保育所のトランポリンやブランコで遊んだ話をしてくれた。そして自転車に乗り始めの頃、自宅近くで自転車に乗ったまま側溝に落ちたことも語ってくれた。この話は大きくなってからも何度も聞かされたという。父であるMさんの言葉を借りれば、Yさんは「鈍くさい」子どもだったようで、小さな頃の失敗をずっと父にも言われ続けたという。

Yさん〈ナラティブ1〉

I 2：小中高と今までにかけて、保育所時代のことで親に「こんなことしたんだよ」などと言われたようなことはありますか？

Y：保育所ではないと思います。家にいたらガラスを割っただの、自転車で落ちただのそういうことは言われますけれども。

I 2：当時の話題としてはあるわけ。

I：一回のことをあとで何回も言われたり。

Y：言いますね。

I 2：その話題をされたときはどう思いましたか？

Y：もういい加減、あきらめています。うちの父さんは何回でも言う人ですから。

I：それは、おまえはドジだとかたろいという感じで言われるんですか？

Y：はい、やっぱりあの頃と変わらないという感じで。

I：そういう文脈で言われるんですか、そういう例を出されるのは。

Y：はい。

Yさんは、長男だったこともあり、下の弟妹たちよりもずいぶん怒られたと記憶している。下の弟妹らは、自分の例があるからあまり怒られていないように感じる。兄弟げんかをして怒られるのは自分。いつも怒られていたような気がするという。

怒られたことで特に印象深いのは、小学校低学年の頃、農作業用の機械に近づいていったことで父親に本気で怒られたという。母親からどういう事で怒られたかはあまり覚えていないが、「片づけなさい」ということは言われた。「勉強しなさい」というのは父親からよく言われた。小学校時代は、野球やサッカーを同じ地域に住む子どもたちと一緒にしていた。そろばんを習いにも行っており、当時はそれほど楽しかったわけではないが、いま考えると数字に強くなったという意味で良かったと思う。この当時、父親には自分勝手なところがあるのではないかと思っていた。いまでもそう思うことがある。

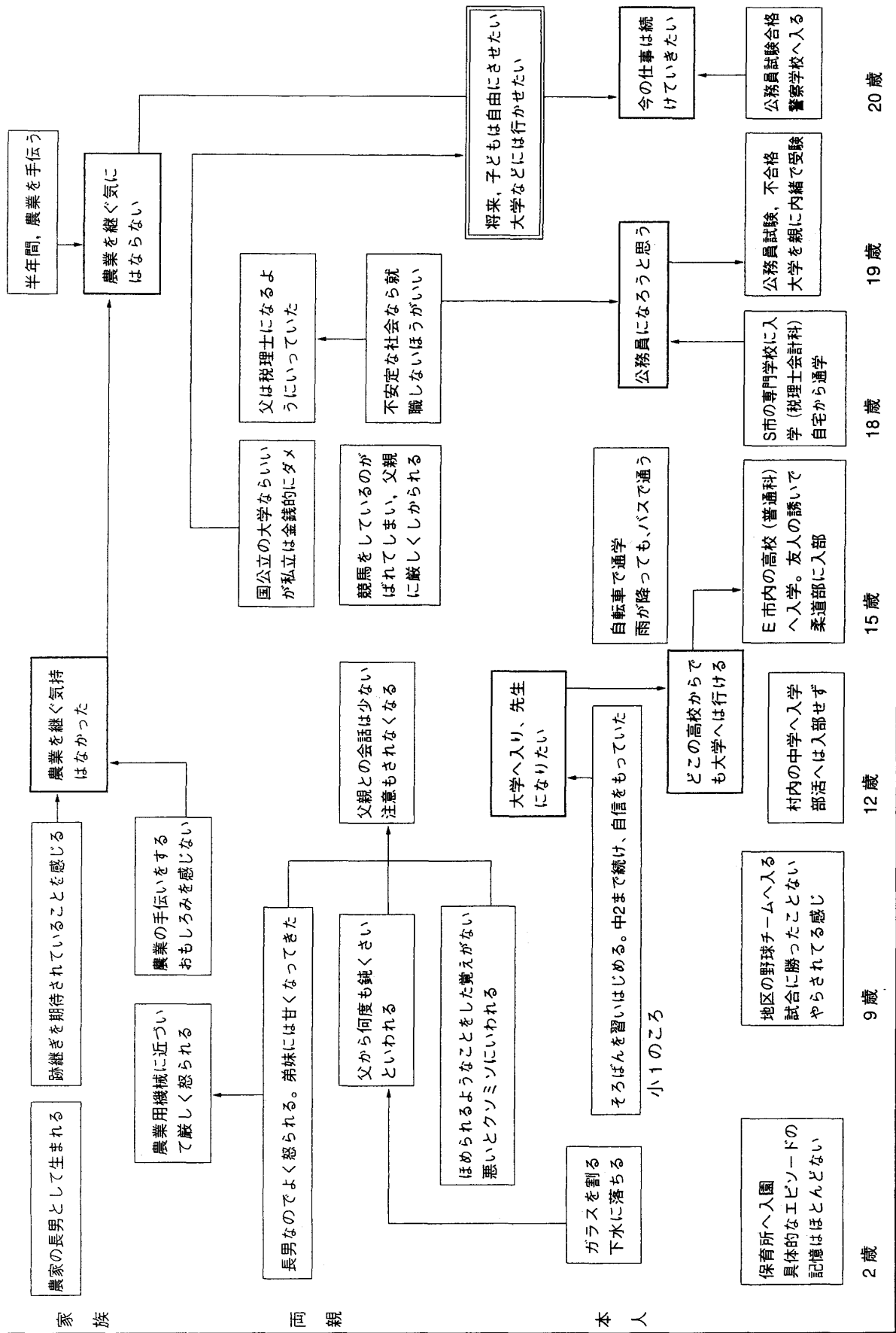


Fig.1 Yさんの生育史心理学的連関図 (請川, 1998)

中学校時代は、卓球部に入ったのだが積極的に選んだわけではない。他に野球とサッカー部があったが、一番楽しそうなのが卓球部だったからという理由である。良くしていた遊びはテレビゲーム。ゲームやプロ野球の話題で盛り上がっていた。この頃、まわりからはスポーツができないので鈍くさい奴だと見られていたとYさんは言う。中学校時代は、小学校の人間関係の延長で生活に楽しみがなかった。高校の3年間は、新しい環境で友人関係も良かった。人も多くなったので、自分に合った人もいた。

大野木（2003）は、現代の子どもたちは地域での遊び文化の衰退の一方で、競争という価値観以外で群れ合う場を失っていると分析する。これは現代に限らず、Yさんの子ども時代も例外ではなかった。また都市部だけの問題ではなく、とりわけYさんが育ったような過疎地域ではより深刻な面も併せ持つ。なぜなら、都会であれば学校以外にも子どもたちが集う場があり、そこで自分らしさを発揮できるような場面を見つける可能性もあるからである。それは遊びの場かも知れないし、習い事などの場面かも知れない。ところが過疎地域では、子どもの数も限られ、さらに悪いことには保育所の頃からずっと同じメンバーが時間と場を共有しているので、いつまで経っても幼い頃の自分のイメージを消し去ることができないのである。Yさんのように「鈍くさい」というイメージが小さい頃についてしまうと、この地域から離れないことにはずっとその印象がついて回ることになる。この点に関しては、請川・滝澤・結城（2002）が行った離島の保育所におけるフィールドワークにおいても、同様の話を聞くことができた。

中学校を卒業する頃には、大学へ行って学校の先生になりたいと思っていた。そして町を出て、近隣の市にある普通高校へ通うことになった。この高校時代が、Yさんにとって最も自分らしさを発揮できた時代だという。

Yさんくナラティブ2＞

I 2：高校を選ぶときにはどういうことを優先して考えましたか？

Y：とりあえず近いところ、あと友達が多かったので（実際に行った高校に）。

I 2：中学校時代、「将来何になりたい」などという展望はありましたか？

Y：中学校を卒業するあたりには、大学に入って学校の先生とか。

I：そういうのを目指していたんだ。

Y：はい。

I：一つの選択肢として農業高校に行くっていうのもありますよね。

Y：はい、いや、それはまったく。家を継ぐ気がなかったので、農業高校という選択はなかったです。

I：農業を継ぐ気持ちがないっていうのは、それはどういう訳ですか？

Y：やっぱり、手伝っていても面白くないんですよね。楽しみを持った職業じゃないと、やるのが苦だったんで。

I 2：小さい頃、（農業を）やりたいと思った時期はなかったですか？

Y：いやー、全然思わないですね。

I 2：親には跡を継いでくれとか、後継者の問題を言われていたとか。

I：言われなくても感じる部分はあると思うんですけども。

Y：やってくれた方がいいというのは、当ても感じていましたね。

I 2：口では言わないですか、お父さん。

Y：言わないですね。「やりたいことをやれ」とは言っていましたけど。やってくれるならそれに越したことはないって感じだった。

I：やりたいことをやれって言うけれども、内心継いで欲しいんだなっていうのを感じるという。

Y：はい。

I：親は農業高校に行って欲しいと思っていたんだろうか？

Y：いや、高校はどこでも構わなかったと思うんですけども。

高校を出るときには、本当は大学へ進学したいという気持ちも持ち続けてはいたが、私立には行かせないと言われたので、短大か専門学校へ行くことにした。だが時期が3月になってしまってから決めたので、結局会計関係の資格が取れるという専門学校しか選べなかった。

この専門学校の2年目、4月辺りからそろそろ就職活動のため動き出すのだが、Yさんは資料を検討する前に父のMさんから就職を反対されたという。

Yさんくナラティブ3

I 2：自分で（就職を）決める頃になって、絞って、ここだったら行きたいなっていうところがありましたか？

Y：絞る前にもう資料に目を通す辺りで、（父に）「そんなところ行かなくてもいい」って言われたんで。

I：それは何でだと思う？

Y：やっぱり安定してないところはダメだとか。

I：農家を継いで欲しいというのが暗にあったからだとか、そういう感じはしない？

Y：少しはあったんだと思いますけれども。

（ 中 略 ）

I 2：じゃあ、ダメだって言って（父親は）何をしろって？

Y：良く分かんないんですよね。公務員とか、そういうのじゃないと、きちんとした企業じゃないとダメなんじゃないかという。

I 2：どこに行けとは言わなかった？

Y：言わなかったですね。

その後、民間の就職は諦めて、公務員を目指すことになる。公務員としては、事務系職員か警察官を考えていた。地元に近い近隣の役場も受けたが不合格だった。「もしか全部落ちたら、どこか大学へでも行こう」と思い、親には言わずこっそり資料を取り寄せ2つ受験をした。大学が不合格ならば、実家に戻って家の手伝いをしながら仕事を探そうかと考えていたのだが、結果2つの大学とも不合格だったので、専門学校を卒業後実家へ戻ることとなった。

その後農業を手伝いながら6月に警察官の試験を受け、無事に合格した。もし合格していなかったら、今ごろはボーッとしていたかと思うが、農業をそのまま継ごうとは思わなかった。

Yさん＜ナラティブ4＞

I 2：まだ分からないとは思いますが、警察というのをずっと続けていくつもりですか？それとも転職する可能性はありますか？

Y：うちの父が死なない限り、たぶんないと思う。

I 2：お父さんが亡くなったら家に帰るといふ考えがあるんですか？

Y：はい。たぶん、健康には問題がないので、突発的に死ななければ大丈夫だと思うんですけど。

I：将来、20年後くらい、お父さんが体動かなくなったら農家を継ぐということも少しは考えてる？

Y：いや、まだ。うちの弟も高校に通っている段階なので、もし今（弟に）いなくなれたら誰が世話するのかって考えると、急に全部売っ払う訳にもいかないから。そういう場合には考えておかないと。

I：弟が跡を継いだりすれば、それはそれでいいわけね。

Y：下（の弟）が二十歳くらいになれば、（警察を）やめる必要もないんですけども。

現在の所は、農業を継ぐつもりはあまりないようだ。もし父親に何かあれば、自分が実家に戻って弟妹を支えていかなくてはならないという考えはあるが、子どもたちが自立してしまえばそういう長男としての責任もなくなり、自分が跡を継がなくてはならないという理由もなくなると考えているようである。

4 ま と め

今回、インタビューとなってくれたYさんは、この時点で農業を継ぐ気持ちにはなっていない。しかし、警察官という新しい道に向かって一步を踏み出した今、父親のMさんは跡継ぎが少し遠ざかったたよながっかりした気持ちもあるだろう。しかしそれだけではなく、この後継者の問題についてまた新たな方策が思い浮かんだかもしれない。実際、母親のNさんは、長男のYさんではなく、末っ子のまだ中学生の息子に跡継ぎを期待していると語ってくれた。このように、子どもの側の変化（ここでは就職）が親の考え方を变えることも十分あるのだということを実感させてくれた。これは最初に述べたように、子育ては子育てでもあり親育てでもあるということの一端であろう。

ところで、今回と同じ地域で調査をさせて頂いた同年齢の別な方からは、親があまり跡を継いで欲しいと思っていないにもかかわらず、自分はすっかり跡を継ぐ気持ちになっているという語りを聞かせて頂いた。また、ちょうど同じ時期にインタビューをした都市部の青年たちは、後継問題があまり関係ない公務員や会社員、教員の子どもたちであった。しかし彼らには、家業の跡継ぎというプレッシャーはないのだが、また違った姿の葛藤が見られる場面もあった。

今後はこれらの人々、そしてその両親の語りについて、順次取り上げていきたいと考えている。

註

- * 1 伊藤勇 2002 意味を生き相互行為する人々の探求 伊藤勇・徳川直人（編著）「相互行為の社会心理学」 北樹出版 p.26
- * 2 同上 pp.32-33
- * 3 例えば、久徳重盛 1979 「母原病」や井深大 1985 「幼稚園では遅すぎる」など。子育てに関してベストセラーとなった本にそういった類のものが少なくない。
- * 4 深谷昌志 1996 「子どもの生活史」 黎明書房 p19-20
「方法論的的な検討」という部分において、自伝を資料とした場合について以下のように述べている。

「自伝を書いた人は人生の成功者である場合が多い。具体的には大都市に生まれ高学歴を取得した専門管理職の男子の記録が大部分を占める。その反面、地方出身で学歴的にも高くなく職業面では農業や自営層、性別では女子の資料は少数に限られていた。」

引用部分は自伝を出典としているわけではなく、札幌市立北九条小学校の調査を用いているが、この小学校はJR札幌駅の北口を出て間もないところに位置しており、都市部の中でも非常に利便性の良い場所である。そこに通う子どもたちであるから、映画も頻繁に見に行くことが出来たのだろう。同じ北海道でも本文中のMさんが住む町には、多くの北海道の町村部と同様に映画館はなく、当時このような生活とはかけ離れていたと思われる。

引用文献

- Bruner, E.M. 1984 Text Play and Story : The Construction and Reconstruction of Self and Society. Waveland Press
- Elder, Jr., Glen H. 1974 Children of the Great Depression : Social Change in Life Experience. University of Chicago Press, (本田時雄・川浦康至・伊藤裕子・池田政子・田代俊子(訳) 1991 「大恐慌の子どもたち(新版)」 明石書店)
- Elder, Jr., Glen H. & Modell, John, & Parke, Ross D. 1993 Children in Time and Place : Developmental and Historical Insights. Cambridge University Press, (本田時雄(監訳) 1997 「時間と空間の中の子どもたち」 金子書房)
- 藤本愉 2003 語り研究における「共同性」の検討 北海道大学大学院教育学研究科紀要 第90号 pp.43-69
- 深谷昌志 1996 「子どもの生活史」 黎明書房
- 原ひろ子 1979 「子どもの文化人類学」 晶文社
- 伊藤勇 2002 意味を生き相互行為する人々の探求 伊藤勇・徳川直人（編著）「相互行為の社会心理学」 北樹出版 pp.23-45
- 古澤頼雄(編) 1986 「見えないアルバム」 彩古書房

- 林道義 1996 「父性の復権」 中央公論新社
- 増田光吉 1969 「アメリカの家族・日本の家族」 日本放送出版協会
- 無藤隆 1990 発達心理学への第一歩 無藤隆・高橋恵子・田島信元（編著）「発達心理学入門Ⅰ」 東京大学出版会 pp.1-9
- 中野卓・桜井厚 1995 「ライフストーリーの社会学」 弘文堂
- 大野木龍太郎 2003 子どものスポーツ 日本子どもを守る会（編）「子ども白書2003」 草土文化 pp.176-177
- 鷹田和喜三 1997 「根釧開拓と移住研究」 釧路叢書第32巻 釧路市
- 請川滋大・北澤梅英・若井邦夫 1998 子育て・子育ての発達生態学（4）「日本教育心理学会第40回総会発表論文集」 p.40
- 請川滋大 1998 子どもの心の問い直し 小川博久・小笠原喜康（編）「教育原理の探求」 相川書房 pp.63-77
- 請川滋大・滝澤真毅・結城孝治 2002 北方圏における子どもの生活とあそび 「北方圏生活福祉研究所年報第8号」 北海道浅井学園大学 pp.39-48
- 若井邦夫・請川滋大・北澤梅英・金澤克美 1997 子育て・子育ての発達生態学（1）～（3） 「日本教育心理学会第39回総会発表論文集」 pp.4-6
- やまだようこ 2000 人生を物語ることの意味 やまだようこ（編著）「人生を物語る」 ミネルヴァ書房 pp.1-38
- 湯沢雍彦 2003 「データで読む家族問題」 日本放送出版協会